

BUDŌ

NEWS

今月のニュース

田嶋剛希（パーク24）
初の天皇杯優勝



令和8年全日本
柔道選手権大会

渡邊聖子（警視庁）
63kg級が優勝掴む



第41回皇后盃全日本
女子柔道選手権大会

▽決勝 田嶋 (右) 対村尾



注目ニュース

令和8年全日本柔道選手権大会 田嶋剛希 (パーク24) が初優勝

令和8年全日本柔道選手権大会（主催＝講道館、全日本柔道連盟）が4月26日、日本武道館で開催された。決勝は、田嶋剛希（パーク24）と村尾三四郎（ジャパンエレベーターサービスホールディングス）が争い、田嶋が隅返で技ありを奪い勝利した。※詳細は、今月のニュース（78ページ～）をご覧ください。

令和8年全日本柔道選手権大会

田嶋剛希（パーク24）が初優勝

同階級対決を制す

体重無差別で柔道男子日本一を決める令和8年全日本柔道選手権大会（主催Ⅱ講道館、全日本柔道連盟）が4月26日、日本武道館で開催された。今大会の決勝はともに90kg級の田嶋剛希（パーク24）と村尾三四郎（ジャパンエレベーターサービスホールディングス）が争い、試合終了間際に田嶋が隅返で村尾から技ありを奪い劇的な初優勝を飾った。中量級（90kg級）以下の選手の優勝は平成24年大会の加藤博剛以来14年ぶり。



決勝

田嶋剛希 ○（隅返） 村尾三四郎

試合終了間際に田嶋（下）が無心の隅返で技ありを奪取し、村尾が主導権を握る中で逆転勝利を収めた

本大会は全国10地区の予選を勝ち上がった選手および推薦選手によって覇が争われ、令和8年の今大会は、予選通過選手40名、推薦選手5名の計45名が出場した。推薦選手には、前回大会優勝・準優勝選手のほか、2025年世界選手権大会優勝者から、60kg級の永山竜樹（パーク24）、66kg級の武岡毅（パーク24）など軽量級（73kg以下）の選手が出場した。

前回大会優勝の香川大吾（ALS OK）は3回戦で姿を消し、過去の本大会優勝者である中野寛太（旭化成）、原沢久喜（長府工業）らの重量級（100kg超級）有力選手も4回戦で敗退した。

今大会のベスト4は、90kg級の田嶋、村尾、100kg級の新井道大（東海大学4年）、100kg超級の太田彪雅（旭化成）であった。

準決勝

準決勝第1試合は田嶋と太田が対戦。互角の攻防が5分間繰り広げられ、判定の結果2―1で田嶋が辛くも勝利した。

準決勝第2試合は村尾と新井の東

海大学先輩・後輩対決。試合中盤で村尾が大外返で有効を奪い、勢いそのまま足車でさらに一本を奪い勝利した。

決勝

決勝は、田嶋と村尾の同階級ライバル対決。ジュニア時代から対戦することが多く、互いに手の内を知る両者の対戦は、村尾が指導1、田嶋が指導2で終盤戦へ。判定に持ち込まれるかと思われたが、残り12秒で田嶋が隅返で村尾を投げ、技あり。そのまま試合時間終了となり、田嶋がライバル対決を制し天皇杯を手にした。

田嶋と村尾の対戦成績は、直近3回の対戦（グランドスラム東京（2024、2025）、2025年世界選手権大会）では村尾が3連勝していたが、今大会は田嶋が勝利し意地をみせた。

同階級の両者は2028年ロサンゼルスオリンピックの代表を争っている。今年10月にアゼルバイジャン・バクーで開催される2026年世界選手権大会には両者とも代表に選ばれており、活躍が期待される。



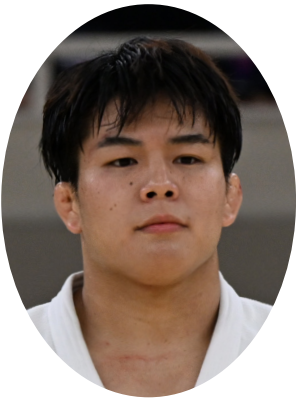
準決勝①
田嶋剛希 ●（判定） 太田彪雅
優勝経験のある太田（右）と互角の攻防を繰り広げた田嶋が、判定2-1で接戦を制した



準決勝②
村尾三四郎 ○（足車） 新井道大
村尾（右）が大外返で有効を奪い、その後すぐに足車でダメ押しの一本を決め快勝した（写真は村尾の大外返）

●優勝者インタビュー

無我夢中の技でライバルに勝利し、確かな手応え



田嶋 剛希
（たじま・こうき）

1997年7月27日生まれ、千葉県出身。身長172cm、体重90kg。国士館中学校、国士館高校、筑波大学を経て、パーク24株式会社に入社。本大会出場は3回目。令和5年本大会3位、2024年アブダビ世界選手権大会（-90kg級）優勝、2025年ブダペスト世界選手権大会（-90kg級）2位、2026年グランドスラム・パリ（-90kg級）優勝。

▼待ち望んだライバルとの対決
「選手権の優勝というよりも、村尾選手に勝てたという気持ちの方が大きいです。ずっと恋焦がれていた相手でしたから」

優勝決定直後は感極まった様子の田嶋選手であったが、インタビューではすがすがしい表情で同階級ライバルの村尾選手についての率直な感想を語った。

「（同階級内の代表争いでは）本当に先に行かれてしまった……一緒に出場する大会ではトーナメントの逆側のシードに配置され、直接戦うには決勝まで上がらないといけないことが多いので、まるで遠距離恋愛の

ような気持ちでいました。今日決勝で戦えると分かった時は『やっと会えた』と思いました」

▼残り12秒で逆転、無我夢中の隅返
決勝について「展開的にはこのまま行ったら負けだと思っていた」と振り返った上で、「何もできずに勝ちを渡すくらいなら、途中から組み方や攻め方を変えながら戦った」と述べた。

「（残り12秒での隅返について）いつもは投げる前に頭の中で展開を組み立てながら投げるんですが、最後の技は本当に無我夢中の技でした。絡まるように投げたので、審判の見

■上位入賞選手コメント

◎準優勝Ⅱ村尾三四郎選手



「延長戦ありの国際大会では最後のような攻め方はしないんですが、判定で勝っているという自信もなかったのが最後攻めに行つたところをやられてしまいました。自分の柔道をみて『すごい』『自分もあるな試合をしてみたい』と思っても

え方によっては相手のポイントになつてしまう可能性もありました」

▼世界選手権大会に向け「しっかり組んでしっかり投げる柔道」を最後に、田嶋選手が今大会を踏まえた今後の展望を語った。

「昨年12月のグランドスラム東京は全く力を出せなかったのですが、今大会はある程度手応えを感じることができました。戦い方はこの方向性で進めていきつつ、目標としている『しっかり組んでしっかり投げる柔道』と両立させながら、世界選手権に向かつていきたいと思います」

○3位Ⅱ太田彪雅選手



「日本武道館での優勝を経験していないので、今日は本当に攻めの気持ちで臨んだのですが、悔しいです。今年の9、10月に愛知県で開催されるアジア競技大会の代表選手としてまた一から頑張ります」

○3位Ⅱ新井道大選手



「前日の記者会見で『とことんやる』と言っておきながら、階級が下の相手に負けているようではまだまだです。来年またここに帰ってきて、次は僕が三四郎先輩（村尾選手）を投げたいと思います」

■出場選手コメント

▽中野寛太選手（令和6年大会優勝）

「新井選手の代名詞である大内刈を警戒していましたが、最後は内股で崩されました。戦略は分かっていたはずでしたが、対応できなかったのが敗因です」

▽原沢久喜選手（平成27・30年大会優勝）

「今年はアメリカに渡り、環境が変わった中での新たな挑戦でしたが残念な結果に終わってしまいました。日本人選手と組む機会もなく試合が空いてしまったのですが、思ったよりは動けました」

▽香川大吾選手（前回大会優勝）

「連覇の緊張は思ったよりもなかったのですが、敗れた佐藤選手（佐藤和哉・日本製鉄）との試合は、序盤に流れをつくられてしまったのが良くありませんでした。この大会で勝つために準備してきたので、これからのことは全く考えていません」

■全日本柔道男子監督コメント

◎鈴木桂治氏

「決勝は村尾選手が押している流れの中、最後は泥くさく諦めなかった田嶋選手が逆転で勝利しました。あの勝ち方は田嶋選手らしくて素晴らしいなと思います。（ベスト4に

しいなと思いました。（ベスト4に重量級選手が1名しかいない現状について）現実をしつかり受け止めるのであれば『今の日本は90kg級が一番強い』ということ。決して悲観するわけではないですが、重量級の選手はもっとやるべきことをやらなければいけないと感じました」



3回戦 香川（左）対佐藤



4回戦 新井（上）対中野

◆世界選手権金メダリストが躍動

例年本大会の注目ポイントとなっている推薦選手。令和8年の今大会には2025年ブダペスト世界選手権大会金メダリストの永山竜樹と武岡毅が出場した。永山は昨年に引き続き3回目の出場、武岡は初出場。

永山は体重100kg超えの小川竜昂（日本製鉄）と対戦。小柄な体格で重量級の選手に技をかける姿に会場は盛り上がったが、試合終了間際に小川の内股が有効となり敗退した。

武岡の初戦は羽田野竜輝（旭化成）との同級生対決。試合前に「できるだけ大きい相手と戦いたい」と話していた武岡は、およそ2倍の体重差のある羽田野を相手に積極的な攻めを見せ、判定3-0で勝利した。

▽永山竜樹選手

「（重量級の選手との試合は）めっちゃ楽しんです。楽しい試合でしたけど、終わった後は本当に死ぬかと思いました。この大会で重量級の選手と戦った経験は自分の階級に戻った時にすごい自信になります。次こそは一勝できるようにまた挑戦したいです」



2回戦 永山（右）対小川



2回戦 武岡（右）対羽田野

▽武岡毅選手
「新井選手とは他の大会でも一緒にすることが多く、『やっぱり強いな』と思っていましたが、見るのと実際に組むのでは全くレベルが違いました。昨年世界選手権でチャンピオンになり、今年もその舞台に立つことができるので、これから自分の階級に戻ってしつかり準備していきたいです」

模範演武

投の形（左）
取 五段 射手矢弦太
受 五段 岩永 憲門

極の形（左下）
取 八段 平野 弘幸
受 七段 南保 徳双

古式の形（下）
取 八段 道場 良久
受 七段 大辻 広文



投の形 射手矢（上）・岩永



極の形 平野（左）・南保



古式の形 道場（右）・大辻



■大会結果

●優 勝Ⅱ田嶋 剛希（パーク24）

◎2 位Ⅱ村尾三四郎（ジャパンエレベーターサービス）

○3 位Ⅱ太田 彪雅（旭化成）

▽5 位Ⅱ佐藤 和哉（東海大学4年）

小畑 大樹（日本製鉄）

原沢 久喜（医療法人ひらまつ病院）

中野 寛太（旭化成）

柔道 その歴史と技法

筑波大学体育系教授 藤堂良明 著

「原点に帰る」には、「原点を知る」必要がある。

柔道の歴史を振り返りつつ、その技法が、どのように形作られてきたのかを、丁寧に解説しています。

柔道の稽古は、技を通して精神を磨き、やがて社会のためになるという教育の道でもあった。時代は移り変われども、日本の伝統に培われた「柔道としての柔道」を見失わないでいただきたいと願うものである。（本書「あとがき」より抜粋）



四六判・上製・330頁・定価2,640円



第一章	組討ちの起こりと技法	第四章	第二次世界大戦後の柔道復活と技法
第二章	柔術諸流派の歴史と技法	第五章	柔道技法の変遷と国際化への課題
第三章	講道館柔道の歴史と技法		

編集・発行 公益財団法人 日本武道館 〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3 TEL 03(3216)5147 FAX 03(3216)5158
ホームページhttp://www.nipponbudokan.or.jp



決勝＝渡邊（左）が米川の奥襟を掴む



皇后盃を掲げ、笑顔を見せる渡邊選手

警視庁 渡邊聖子（63kg級）が初優勝

第41回皇后盃全日本女子柔道選手権大会

●優勝者インタビュー
渡邊聖子選手（東京／警視庁）

皇后盃という大きな舞台に立てたことを誇りに思っています。決勝は今までやってきた自分の柔道を出し切って、全力で戦いました。

米川選手は強い選手と知っていたので、相手に良いところを持たせてしまつたら、自分が負けてしまうと思ったので、自分から良いところを持って技を仕掛けていきました。自分から先に先に組手をしたのが勝因だと思います。

去年、講道館杯で負けてしまつて、選抜大会にも出れなかったなかで、皇后盃に挑戦して、何が何でも優勝することを目標にしていたので、優勝することができて嬉しいですね。

少しでも自分の背中をみて、チームのみんなも頑張ろうという気持ちになつてくれたら嬉しいなと思います。チームのみんなには本当に感謝しています。

前回大会からいわゆる「足取り」（相手と組んだ状態から相手の帯から下を掴む行為）が解禁され、小柄な選手が大柄な選手に対して足取りを行い、果敢に攻める姿が随所で見られた。

◇

渡邊は、初戦で前回大会2位の白金に3-0の旗判定で勝利を収め、3回戦では、竹村安生（兵庫県警察）に崩上四方固で一本勝ち。準決勝では、3-0の旗判定で古賀に勝利し、決勝に進出した。

もう一方のブロックでは米川が決勝に進出。100kgの体格を活かし、準々

第41回皇后盃全日本女子柔道選手権大会（主催＝講道館、全日本柔道連盟）が4月19日に横浜武道館（神奈川県横浜市）で開催された。体重無差別級で行われる同大会には、全国から推薦選手2名（前年度優勝者、同第2位）、地区選出選手34名の計36名が集い女王の座を争った。

2連覇を目指す田中伶奈（大阪府警察）と前回大会2位の白金未桜（筑波大学3年）はともに初戦で敗退した。準々決勝では、1992年バルセロナ五輪71kg級金メダリストの古賀稔彦氏を父に持つ57kg級の古賀ひより（パーク24）が、78kg超級の朝比奈沙羅（FUKUDEN&GRIP）に70kg以上の体格差を跳ね返し判定勝ちを収めた。「柔よく剛を制す」を体現した姿に、会場から大きな拍手が湧き起こった。

決勝は渡邊聖子（警視庁）と米川明穂（コマツ）の顔合わせ。勝負は旗判定となり、3本とも渡邊に上がり初出場が初優勝に輝いた。

決勝では2026年全日本選抜柔道体重別選手権大会78kg級王者の杉村美寿希（パーク24）に反則勝ちした。

◇

決勝は、渡邊と米川のどちらが勝つても初優勝となる一戦。渡邊は、1回戦から準決勝までは喧嘩四つの相手が続いたが、決勝は合い四つの試合展開。渡邊は米川の奥襟を掴み得意な形を作ると、果敢に技を仕掛けていく。「聖子先輩、ファイトー！」という子どもの大きな声援にも後押しされ、終始攻め続けた渡邊は判定の末、3-0で初優勝を飾った。



MIND賞表彰
中村真一全日本柔道連盟会長から受賞者を代表して成田にこさん（横浜市立大鳥中学校）と大柿天馬さん（朝飛道場）に盾が贈られた

・2025年度MIND賞表彰
全日本柔道連盟では、柔道MINDの普及・啓発を推進していく取り組みとして、嘉納治五郎師範が目指した「柔道を通じた人づくり」を推進する活動に対して、理解および実践に寄与した小学生および中学生を対象とし、MIND賞を新設。

2025年度は小学生16名、中学生14名、計30名が受賞した。

※MANNERS＝礼節
INDEPENDENCE＝自立
NOBILITY＝高潔
DIGNITY＝品格
をそれぞれ表しています。



【大会結果】

- ▽優勝 渡邊聖子（警視庁）
- ▽第2位 米川明穂（コマツ）
- ▽第3位 長谷川瑞紀（JR東日本）
- ▽第4位 古賀ひより（パーク24）
- ▽第5位 丸山みかの（JR九州）
- 杉村美寿希（パーク24）
- 泉真生（コマツ）
- 朝比奈沙羅（FUKUDEN&GRIP）



試合の様子



本大会の会場となった横浜武道館



準決勝①＝渡邊（左）が足取りを仕掛ける



準決勝②＝米川（上）が内股で一本

準決勝①

渡邊聖子 ●判定 古賀ひより

試合開始と同時に渡邊は、古賀の奥襟を掴みにかかる。古賀は積極的な渡邊の攻めに対して、後の先の形になった。渡邊は得意の奥襟を掴む体勢に持ち込む一方、古賀は消極的な姿勢や極端な防御姿勢が重なり指導を3回受けた。最終攻め続けた渡邊が3-0の旗判定で勝利した。

準決勝②

米川明穂 ○内股 長谷川瑞紀

米川と長谷川瑞紀（JR東日本）の一戦は、喧嘩四つの試合展開となった。序盤は両者攻め手を欠き、消極的な姿勢とみなされ両者に指導がはいった。試合開始1分43秒、米川は両手でしつかりと組んで長谷川を制圧したところで、鮮やかな内股を決め一本を奪った。

柔道 その歴史と技法

筑波大学体育系教授 藤堂良明 著

「原点に帰る」には、「原点を知る」必要がある。

柔道の歴史を振り返りつつ、その技法が、どのように形作られてきたのかを、丁寧に解説しています。

武道の稽古は、技を通して精神を磨き、やがて社会のためになるという教育の道でもあった。時代は移り変われども、日本の伝統に培われた「武道としての柔道」を見失わないでいただきたいと願うものである。（本書「あとがき」より抜粋）



四六判・上製・330頁・定価2,640円



- 第一章 組討ちの起こりと技法
- 第二章 柔術諸流派の歴史と技法
- 第三章 講道館柔道の歴史と技法
- 第四章 第二次世界大戦後の柔道復活と技法
- 第五章 柔道技法の変遷と国際化への課題

編集・発行 公益財団法人 日本武道館 〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3 TEL 03(3216)5147 FAX 03(3216)5158 ホームページhttp://www.nipponbudokan.or.jp

日本武道館の単行本

剣道の文化誌 明治大学教授 長尾 進 著
四六判・上製・480頁・定価2,640円
本書では剣道の持つ文化としての多様な面を、時代を追いつながら、わかりやすく紹介する。剣道を愛好する方には剣道を改めて見直すきっかけとして、剣道をあまりご存知ない方には剣道という日本文化の成り立ちを知るガイドとして、ぜひ一読を。

剣道 その歴史と技法 埼玉大学名誉教授 大保本輝雄 著
四六判・上製・516頁・定価2,640円
本書は戦国末期から江戸時代初期を起点に、今日に至るまでの剣道の歴史の発展の経緯を示した。戦国期以前の剣術の有り様を認識した上で改めて各時代の流れに沿った剣道史を考えてみたいという筆者の思いを実現すべく、連載終了後5年のときを経てついに単行本化。

柔道 その歴史と技法 筑波大学名誉教授 藤堂良明 著
四六判・上製・330頁・定価2,640円
柔道の技法が、どのように形づくられてきたのかを、体術の起こり、柔術諸流派の歴史に遡り、丁寧にひもとく。さらには、全日本選手権やオリンピックをはじめとした各種競技大会にみられる技法を分析し、今後の課題を語る。

空手道 その歴史と技法 小山正辰・和田光二・嘉手苅徹 著
四六判・上製・568頁・定価2,640円
空手は沖縄で発祥し、日本本土に伝承され、今や世界のKARATEとなった。その歴史と技法を、那覇系剛柔流の小山正辰氏、首里系松濤館の和田光二氏、沖縄空手研究の第一人者である嘉手苅徹氏の共同執筆で体系的に追綴。嘉手苅氏が発見した剛柔流の開祖・宮城長順の最新の事実、小山・和田の両世界チャンピオンのエピソードなども満載。空手の真髄に迫る白眉の一冊。

マンガ・日本武道風土記 漫画家・別府大学客員教授 田代しんたろう 著
B5判・並製・248頁・定価1,100円
全国の「武道ゆかりの地」を実際に訪ねて、ペンとスケッチブックを片手に徹底取材。地元関係者や施設の学芸員とのやりとり、その土地の成り立ちをわかりやすくマンガで紹介。多数の資料をもとに丹念に描いた当時の風景も魅力の一つ。マンガの世界で日本各地をめぐってみては。

死ぬまで弓道 弓道教士七段 小牧佳世 著
四六判・上製・342頁・定価2,640円
競技中に急性大動脈解離に倒れた筆者は奇跡的な生還を果たす。その8カ月後に弓道を再開し、わずか2年後に皇后盃で十射皆中、優勝を果たした。本書では激動の自信を記し、弓のあり方や「早気」など弓道家の誰もが陥る課題などを模索する。死の淵を覗き、現在も全身全霊で弓を引き続ける筆者だからこそ記せた弓道伝記かつエッセイ

学校武道の歴史を辿る 筑波大学名誉教授 藤堂良明 著
四六判・上製・354頁・定価2,640円
明治維新を迎え、武術は衰退したが、近代化の過程で武道が「人間形成の道」として学校制度の中に組み込まれ、発展した。太平洋戦争後に武道は全面禁止となるが、それを乗り越え、「格技」として復活。平成24年度には「中学校武道必修化」が実現した。学校武道の歴史を丹念に辿り、今後のあり方を語る。

ご注文・お問い合わせ
(公財) 日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
https://www.nipponbudokan.or.jp

全日本銃剣道連盟創立 70 周年記念

第 70 回全日本銃剣道優勝大会

防衛省第 1 部 悲願達成！

11 普連が大会制覇



防衛省第 1 部決勝・大将戦＝11 普連・柴田（左）が上臈を狙う

全日本銃剣道連盟創立 70 周年記念
第 70 回全日本銃剣道優勝大会（主催
II 全日本銃剣道連盟）が 4 月 19 日に
日本武道館で開催され、全国から 4
部門に計 194 チーム 938 名が出場し、白
熱した試合が繰り広げられた。
防衛省第 1 部は、第 11 普通科連隊
（北海道）が初優勝を果たした。
防衛省第 2 部は、日本原駐屯地（岡
山）が 3 連覇を達成した。
一般の部は、元氣道場（新潟）が
初優勝を手にした。
女子の部は、普通科教導連隊（静
岡）が 2 年ぶりの優勝を果たした。

防衛省第 1 部 5 人制 49 チーム

◆決勝
11 普連 3―2 42 即機連
鳥澤俊輔 上― 緒田慶一朗
遠藤順也 判― 豊永僚太
赤平翔太 判― 小関晃
福田侑麻 上― 宮本翔
柴田将誠 判― 井上聖太
決勝は、初優勝を目指す第 11 普通
科連隊と第 42 即応機動連隊（熊本）
の顔合わせとなった。
次鋒戦を終え、2―0 で 11 普連が
あと 1 勝で優勝となる状況から、42

即機連が意地をみせ、中堅・副將戦
を連取し、優勝の行方は大将戦へと
持ち越された。

大将戦は、11 普連・柴田と 42 即機
連・井上の一戦。本戦の 3 分間では
決着がつかず、試合は 2 分間の延長
戦に突入。延長戦でも、両者果敢に
攻め合い、決定打が出ないまま試合
時間は経過していく。延長戦終盤に
は、柴田が上臈を積極的に狙うも、
旗は上がらず、両者に一本が出ない
まま試合終了。判定の結果、柴田が
接戦を制し、11 普連が悲願の初優勝
を果たした。

優勝 II 11 普連・鈴木康宏監督

「現在、自衛隊の訓練や業務が忙し
い中で、部隊から送り出していただ
いて、いい結果を出せたことが嬉し
いですし、誇らしいです。大将の柴
田は元々 11 普連の隊員ではありませ
んでしたが、11 普連の隊員としてプ
ライドを持って試合に臨んでくれ
て、最後に優勝を決める判定勝ちを
収めてくれた姿は、とても格好よか
ったです。各隊員については、もし
異動などで 11 普連を離れることにな
っても、今回の優勝を胸に頑張っ

ほしいです」

防衛省第 2 部 5 人制 74 チーム

◆決勝

日本原 5―0 帯広
大橋真悟 上下―下 厨子真守
松延靖大 上― 小林栄一
川上立祥 上上― 桑波田一騎
大庭裕二 上上― 江口俊太郎
藤原考貴 下下―下 水上伸吾
3 連覇を狙う日本原駐屯地と帯広
駐屯地（北海道）の一戦。
先鋒戦、日本原・大橋が先取され
るも、2 本を奪い返し、勝利を収め
る。次鋒戦、日本原・松延が延長戦
で上臈を決め、優勝に王手をかけ
る。そして迎えた中堅戦。日本原・
川上が開始約 1 分ほどに、立て続け
に上臈を連取して勝利。この時点で
日本原の優勝が決まる。その後の副
将・大将戦も日本原がポイントを奪
い、5―0 の圧巻の強さで 3 連覇に
輝いた。

優勝 II 日本原・上田啓二監督

「3 連覇をできたということではっ
としていきます。先鋒と次鋒がいい仕
事をしてくれたので、チームとして



防衛省第 2 部決勝・中堅戦＝日本原・川上（左）が上臈を決める

もいい流れができて全勝優勝できました。特に先鋒の大橋選手が一本取られた後に2本取り返して勝ったところが決め手になったと思います。過去に11連覇しているので、その記録に少しでも近づけるように、また、超えられるように日々精進してまいります」

■一般の部(3人制・38チーム)

◇決勝

元氣道場 2―1 東京A
野口将史 判― 藤光祐杜
捧 論 ―上 西飯勝哉
滝沢元氣 上上― 下里勝秋

昨年準優勝の元氣道場と東京支部Aの一戦。先鋒戦、元氣道場・野口と東京A・藤光の試合は、本戦、延長戦ともに一本は出ず、試合終了。野口が旗判定で勝利し、貴重な1勝を元氣道場が先取した。中堅戦、後がない東京A・西飯は、開始早々に元氣道場・捧の上胴を捉えて一本を先取。そのまま相手に付け入る隙を与えず、一本を守りきり、勝利を収めた。大将戦、元氣道場・滝沢が開始1分で上胴を決めて一本を奪う。その約20秒後、フェイントを入れた

東京A・下里の隙を逃さずに、滝沢が再度上胴を決めて試合終了。元氣道場が接戦を制し、初優勝に輝いた。

◎優勝Ⅱ元氣道場・滝沢元氣選手兼監督

「とても嬉しいですね。決勝はいつもと違った環境での試合でしたので、緊張もあつたと思いますが、先鋒が判定勝ちを収めてくれたので、後は

大将の私がなんとかするつもりでした。自分の想定内の形でやれたと思います」

■女子の部(3人制・33チーム)

◇決勝

普教連 2―1 大村
森川友紀子 上上― 田中陽菜
―不戦勝 永木友梨
今澤美紗貴 ノ― 里 麻衣



一般の部決勝・大将戦＝元氣道場・滝沢（右）が上胴を決める

今大会2人で出場し、決勝に勝ち上がった普通科教導連隊と大村駐屯地（長崎）の昨年の決勝と同じ顔合わせ。
先鋒戦、普教連・森川が開始早々に上胴を立て続けに2本決め、圧巻の強さで大将の今澤にバトンを繋ぐ。大将戦、今澤と昨年初開催の全日本女子銃剣道選手権大会で優勝した大村・里の一戦。両者一步も譲らず試合が進む中で、今澤が終盤に積極的に仕掛けてくる里の空いたノドを突き、一本を奪う。巻き返しを図りたい里であつたが、残り時間も少なく、追いつくことはできず試合終了。普教連が2人での大会制覇を果たした。

◎優勝Ⅱ普教連・小倉弘之監督

「優勝できてほっとしました。昨年、私は監督ではありませんでしたが、女子の戦いを見ました。今年の決勝も同じカードで本人たちもリベンジを果たしたいと強く思っていたことが結果に繋がったと思います。決勝の大将戦については、今澤自身も里選手に対して苦手意識があつたので、それをいかに感じさせず



女子の部決勝・大将戦＝普教連・今澤（左）がノドを捉えて一本勝ち



防衛省第1部・優勝＝第11普通科教導連隊



防衛省第2部・優勝＝日本原駐屯地



一般の部・優勝＝元氣道場



女子の部・優勝＝普通科教導連隊

【大会成績】

▼防衛省第1部Ⅱ①第11普通科教導連隊（北海道）②第42即応機動連隊（熊本）③普通科教導連隊（静岡）、第16普通科教導連隊（長崎）

▼防衛省第2部Ⅱ①日本原駐屯地（岡山）②帯広駐屯地（北海道）③松山駐屯地（愛媛）、横田基地（東京）

▼一般の部Ⅱ①元氣道場（新潟）②東京支部A（東京）③北鎮剣友会（北海道）、本間道場A（神奈川）

▼女子の部Ⅱ①普通科教導連隊（静岡）②大村駐屯地（長崎）③第1普通科教導連隊（東京）、第13普通科教導連隊（長野）

